慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジュニアユースサッカー選手の心理的競技能力について
Sub Title	A research of psychological competitive ability for junior youth soccer players
Author	大獄, 真人(Otake, Masato) 須田, 芳正(Suda, Yoshimasa) 植田, 史生(Ueda, Fumio) 石手, 靖(Ishide, Yasushi) 依田, 珠江(Yoda, Tamae) 古賀, 初(Koga, Hajime) 田中, 博史(Tanaka, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	2003
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.42, No.1 (2003. 1) ,p.1- 7
JaLC DOI	
Abstract	In the competitive sports, it is essential that the players should have mental strength in bringing their skill and talents fully into play. It is important not only for the professional or senior athletes but also the junior athletes to have mental strength. Tokunaga developed the Diagnostic Inventory of Psychological Competitive Ability for Athletes, as a method for diagnosing athletes' psychological traits. The purpose of this study was to investigate the psychological competitive ability for junior youth soccer players using Diagnostic Inventory of Psychological Competitive Ability for Athletes (DIPCA. 2). The subjects were made on 177 junior youth soccer players from Keio Futsubu soccer team (K:n=55), Gyosei middle school soccer team (G:n=55), and Kawasaki Flontale soccer club (F:n=67). Average of total scores in all subjects was 166.6 ± 21.96, between the teams, F scored highest in the three teams, the second was G and K was lowest (F: 179.2 ± 21.57, G: 164.8 ± 20.46, K: 156.2 ± 19.98). In comparison of different team, F was higher in volition for competition, confidence, and strategic ability than K and G. On the other hand, there were no significant differences for mental stability and concentration. These results suggested that the psychological competitive ability for junior youth soccer players was influenced by the member structure and/or the training environment (coaching staffs, training programs etc.) except for mental stability and concentration.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00420001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジュニアユースサッカー選手の心理的競技能力について

大嶽　真人*　須田　芳正*　植田　史生**　石手　靖***
依田　珠江*　古賀　初****　田中　博史*****

A research of psychological competitive ability for junior youth soccer players

Masato OTAKE[1], Yoshimasa SUDA[1], Fumio UEDA[2], Yasushi ISHIDE[3],
Tamae YODA[1], Hajime KOGA[4], Hiroshi TANAKA[5]

In the competitive sports, it is essential that the players should have mental strength in bringing their skill and talents fully into play. It is important not only for the professional or senior athletes but also the junior athletes to have mental strength. Tokunaga developed the Diagnostic Inventory of Psychological Competitive Ability for Athletes, as a method for diagnosing athletes' psychological traits. The purpose of this study was to investigate the psychological competitive ability for junior youth soccer players using Diagnostic Inventory of Psychological Competitive Ability for Athletes (DIPCA. 2). The subjects were made on 177 junior youth soccer players from Keio Futsubu soccer team (K: n=55), Gyosei middle school soccer team (G: n=55), and Kawasaki Flontale soccer club (F: n=67). Average of total scores in all subjects was 166.6 ± 21.96, between the teams, F scored highest in the three teams, the second was G and K was lowest (F: 179.2 ± 21.57, G: 164.8 ± 20.46, K: 156.2 ± 19.98). In comparison of different team, F was higher in volition for competition, confidence, and strategic ability than K and G. On the other hand, there were no significant differences for mental stability and concentration. These results suggested that the psychological competitive ability for junior youth soccer players was influenced by the member structure and/or the training environment (coaching staffs, training programs etc.) except for mental stability and concentration.

緒　　言

競技スポーツでは強い精神力を持っていないと本番の試合では本来の実力を発揮することができないと言われている。そのため多くのスポーツ心理学者は競技スポーツでの精神力の重要性について指摘し，強化の方法を探求している。徳永（1988）はスポーツ選手の「精神力」をスポーツ選手が試合場面で必要な心理的能力として「心理的競技能力」と呼び，その一般的傾向を調べるための調査法を研究した。

徳永（1988，1994）は精神力を構成する「競技意欲」「精神の安定・集中」「自信」「作戦能力」「協調性」の5因子とその下位尺度として，忍耐力，闘争心，自己実現意欲，勝利意欲，自己コントロール能力，リラックス能力，集中力，自信，決断力，予測力，判断力，協調性の12尺度を抽出し，総合的な精神力を測定することができる心理的競技能力診断検査を開発した。この「心理的競技能力診断検査」（Diagnostic Inventory of Psychological Competitive Ability for Athletes：以下 DIPCA

*慶應義塾大学体育研究所助手　1) Instructor, Institute of Physical Education, Keio University
**慶應義塾大学体育研究所助教授　2) Associate professor, Institute of Physical Education, Keio Umiversity
***慶應義塾大学体育研究専任講師　3) Assistant professor, Institute of Physical Education, Keio University
****東京電機大学　4) Tokyo Denki University
*****大東文化大学　5) Daito Bunka University

と略記する）は，精神力とパフォーマンスの関係に関する研究に広く用いられている。

一般的に精神面の強化は国際大会や全国大会レベルの選手での重要性が指摘されているが，心理的スキルはジュニア選手にとっても競技成績を規定する重要な要因であると考えられる。しかしジュニア期を対象とした心理的競技能力に関する研究は，村上ら（2002）がジュニアテニス選手の競技レベル差で比較検討したものがあるものの，サッカーなどのチームスポーツを対象にした研究はほとんど見られない。このように先行研究においてジュニア期のチームスポーツ選手に対する調査が乏しい現状に加え，心理的競技能力が年齢的にいつ頃から養われ，どのように高められていくのかということも明らかにされていない。

またジュニア期のサッカーチームの指導・運営体制は，学校スポーツの中で行われている部活動とＪリーグチームの下部組織に代表されるクラブチームに分けられ，それぞれの体制はチームの指導者の立場，指導方針・理念，あるいは練習環境（時間・場所）また選手の入部の経緯などが異なっている。しかし，先行研究において心理的競技能力は，競技レベル，競技年数，性差，種目差が影響を及ぼすことが明らかになっているが，ジュニア期のサッカー選手にもそのような要因あるいは異なる指導・運営体制による選手を取り巻く環境の違いが心理的競技能力に影響を及ぼすのかどうかという点も明らかになっていない。そこで本研究では，慶應普通部，暁星中学校とＪリーグ川崎フロンターレサッカークラブを対象に調査を行い３チームの心理的競技能力を比較検討した。

方　　法

1）対　　象

中学１生から中学３年のジュニアユース年代のサッカー選手177名，平均年齢は13歳３ヶ月，平均競技歴は６年２ヶ月を対象とした。それぞれの選手の平均年齢，平均競技歴の平均値は以下の通りである。なお，信頼性尺度において著しく得点の悪いものと無回答の項目があるものについては，すでに除外したデータ数である。

慶應義塾普通部サッカー部（以下Ｋサッカー部と略す）55名，平均年齢は13歳６ヶ月，平均競技歴は４年６ヶ月，地区予選を勝ち抜き県大会に出場する中学校で，大学生がコーチとして派遣されて練習を行っている。

暁星中学校サッカー部（以下Ｇサッカー部と略す）55名，平均年齢は13歳１ヶ月，平均競技歴は６年７ヶ月，５年連続で全国中学校大会に出場し優勝経験があり，付属の小学校サッカー部からほぼ９割の生徒がサッカー部に入部する。また，小学校時代から中学校のサッカー部と同じグランドで練習を行い合同練習も行われている。小中高と一貫性の指導体制がとられている。

川崎フロンターレサッカークラブ（以下Ｆサッカークラブと略す）67名，平均年齢は13歳２ヶ月，平均競技歴は７年３ヶ月，Ｊリーグの下部組織で近隣小学生からこのクラブのジュニアユースに入るための選抜が行われ，指導ライセンスを持ったプロコーチが指導を行っている。同じグランドではユース選手の練習が行われているためユースレベルの指導や練習の交流が行われている。また，ほとんどの選手はＪリーグなどのプロ選手になりたいという目標を立てている。

2）調査時期

平成14年４月中旬から５月中旬に実施した。

3）調査方法

各学校の教室，クラブのミーティングルームで，選手を一同に集め集団で実施してその場で回収した。各チーム試合がない時期で試合にかかわる要因が心理的競技能力に影響しないよう配慮した。

4）調査内容

調査には徳永ら（1994）が開発したDIPCA.2を用いた。加えて，フェイスシートに氏名，年齢，ポジション，所属チーム，競技年数，目標を記入させた。この検査は競技場面でスポーツ選手に必要とされる心理的能力に関する52の質問項目から構成され，その内容は忍耐力，闘争心，自己実現意欲，勝利意欲，自己コントロール能力，リラックス能力，集中力，自信，決断力，予測力，判断力，協調性の12の尺度に分類され，さらにその12尺度は競技意欲，精神の安定・集中，自信，作戦能力，協調性の５因子に類別される。

5）統計処理

集められたデータをチーム毎に集計して，尺度毎の平均値および標準偏差を求めた。尺度毎にチーム間での平均値の差の検定を多重比較を用いて行い，比較検討した。

結　　果

表１に全177名とチーム毎の心理的競技能力診断検査の各尺度，および因子別の平均値と標準偏差をまとめた。総合得点を見ると，全体の平均値が166.6±21.96点と

表１．ジュニアユースサッカー選手の心理的競技能力の平均値および標準偏差

対　　象	total n=177		Kサッカー部 n=55		Gサッカー部 n=67		Fサッカークラブ n=55	
尺度および因子	m	sd	m	sd	m	sd	m	sd
1. 忍耐力	14.3	2.71	13.5	2.71	14.3	2.77	14.9	2.66
2. 闘争心	16.5	2.96	15.9	2.72	15.8	3.40	17.5	2.56
3. 自己実現意欲	16.3	2.53	15.6	2.84	15.7	2.69	17.4	1.95
4. 勝利意欲	15.4	2.58	15.0	3.14	15.1	2.28	16.2	2.22
5. 自己コントロール能力	14.2	2.68	14.2	2.45	14.0	2.84	14.6	2.69
6. リラックス能力	13.1	3.97	12.2	4.40	13.0	3.75	14.1	3.73
7. 集中力	14.9	2.48	14.5	2.39	14.8	2.47	15.4	2.48
8. 自　信	12.1	3.33	10.1	2.81	11.8	2.99	14.0	3.24
9. 決断力	12.2	2.87	10.9	2.85	12.0	2.72	13.4	2.91
10. 予測力	11.4	2.76	9.9	2.32	11.6	2.90	12.6	2.67
11. 判断力	11.6	2.92	10.3	2.73	11.8	2.83	12.5	3.10
12. 協調性	15.2	3.28	14.1	3.68	15.0	3.43	16.5	2.44
Ⅰ 競技意欲	62.2	8.19	60.0	8.20	60.8	8.76	66.0	6.73
Ⅱ 精神の安定・集中	42.2	7.98	40.9	8.02	41.8	7.88	44.1	7.88
Ⅲ 自　信	24.2	5.86	21.0	5.31	23.8	5.19	27.5	5.79
Ⅳ 作戦能力	22.9	5.28	20.2	4.74	23.4	5.21	25.1	5.37
Ⅴ 協調性	15.2	3.28	14.1	3.68	15.0	3.43	16.5	2.44
総合得点	166.6	21.96	156.2	19.98	164.8	20.46	179.2	21.57

なり，チーム別ではＦサッカークラブが 179.2 ± 21.57 点で最も高く，次いでＧサッカー部が 164.8 ± 20.46 点，Ｋサッカー部が 156.2 ± 19.98 点を示した。

図１の因子別の得点結果を見てみると，競技意欲はＦサッカークラブがＫおよびＧサッカー部に対して有意に高かった（図 1-a)。精神の安定・集中に関しては３チーム間に有意な差は見られなかった（図 1-b)。自信はＦサッカークラブ，Ｇサッカー部，Ｋサッカー部の順に高く，それぞれのチーム間に有意差が示された（図 1-c)。作戦能力はＦサッカークラブの得点がＧおよびＫサッカー部に対して有意に高かった。一方，Ｇサッカー部とＫサッカー部間には違いは見られなかった（図 1-d)。協調性はＦサッカークラブがＫサッカー部に対してのみ，有意に高かった（図 1-e)。

次にそれぞれの因子の下位尺度をグラフに示した。図２は競技意欲の下位尺度を表している。忍耐力（図２-a)，

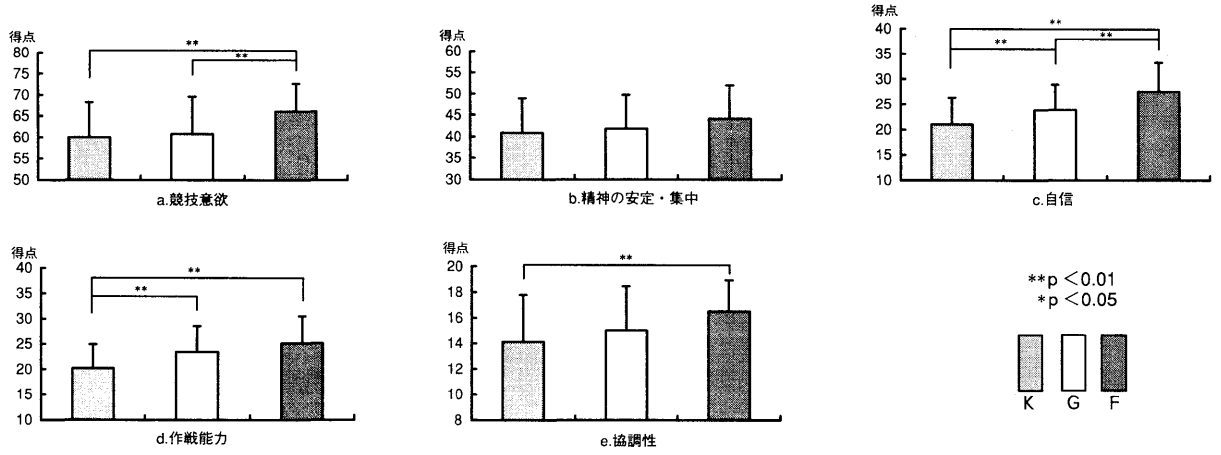


図１．　チーム間における各因子の比較

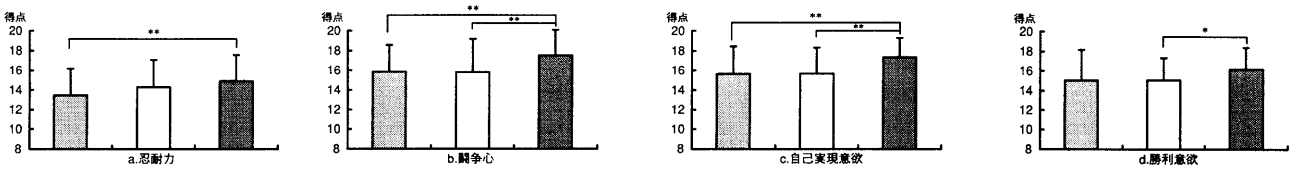


図 2.　チーム間における「競技意欲」の下位尺度の比較

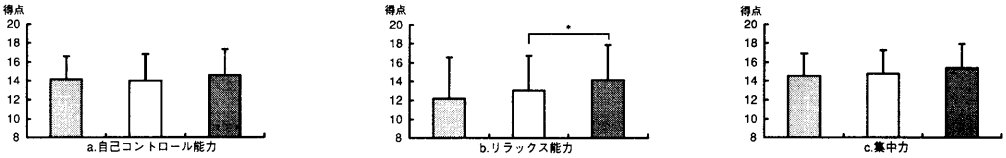


図 3.　チーム間における「精神の安定・集中」の下位尺度の比較

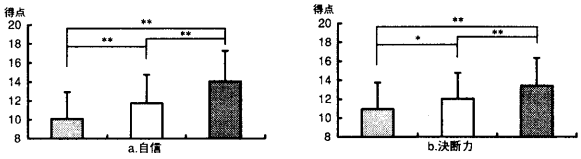


図 4.　チーム間における「自信」の下位尺度の比較

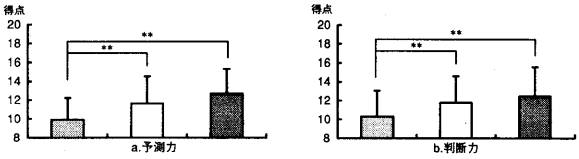


図 5.　チーム間における「作戦能力」の下位尺度の比較

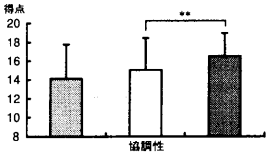
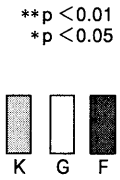


図 6.　チーム間における「協調性」の下位尺度の比較



勝利意欲（図 2 -d）は F サッカークラブが一番高かった。闘争心（図 2-b）は F サッカークラブが G および K サッカー部に対して有意に高く，自己実現意欲（図 2 -c）も同様に F サッカークラブが他の 2 チームに比べ高かった。

精神の安定・集中の下位尺度である自己コントロール能力（図 3-a），リラックス能力（図 3-b），集中力（図 3 -c）には F サッカークラブが高い傾向が見られ，リラックス能力にのみ F サッカークラブと G サッカー部の間に有意な差が示された。

自信の下位尺度である自信（図 4-a）と決断力（図 4 -b）を見てみると，自信においては F サッカークラブが最も高く，次いで G サッカー部，そして K サッカー部が最も低いという結果で，それぞれのチーム間に有意な差が示された。同様に決断力についても F サッカークラブが G および K サッカー部に対して有意に高かった。また G サッカー部は K サッカー部に対しては有意に高いことが示された。

作戦能力の下位尺度である予測力（図 5-a）と判断力（図 5-b）は G サッカー部および F サッカークラブが K サッカー部より有意に高かった。

協調性の下位尺度である協調性は F サッカークラブが最も高く，次いで G サッカー部，K サッカー部という順になった。F サッカークラブは K サッカー部に対してのみ有意に高かった（図 6）。

考　　察

ジュニアユースサッカー選手の心理的競技能力

表1より，ジュニアユースサッカー選手の心理的競技能力は総合得点が 166.6 ± 21.96 点であった。同年代他競技の選手の心理的競技能力を調べたものとして，村上ら（2002）が全国選抜大会に出場したジュニアテニス選手を対象として調査したものがある。それによると，総合得点は 184.5 ± 21.00 点で非常に高い得点を示している。そこで全国レベルのＧサッカー部とＫサッカークラブの総合得点 164.8 ± 20.48 点，179.2 ± 21.57 点と比較すると，ジュニアユースサッカー選手の心理的競技能力はジュニアテニス選手に比べ低い得点傾向を示しているが，サッカーはチームスポーツ，一方テニスは個人競技という競技特性の違いがあると考えられる。さらに徳永ら（2000）はスポーツ種目を分類し特徴を調べており，テニスなどのネット型スポーツが自信や作戦能力に優れている一方で，サッカーなどのゴール型スポーツは相対的に低得点を示していると報告している。このようにジュニア期においても心理的競技能力には種目差が生じていることが示唆された。

一方，本研究の結果と上向（2000）の大学サッカー選手の結果とを比較すると，大学生サッカー選手の総合得点は 189.1 ± 22.65 点でジュニアユースサッカー選手は非常に低い得点を示している。特に精神の安定・集中因子の下位尺度であるリラックス能力，自信因子の下位尺度である決断力および作戦能力因子の予測力，判断力は大学生サッカー選手の得点との差が見られた。上向（2000）は競技経験年数，競技レベルの差が心理的競技能力の優劣に大きな影響を与えているということを示唆しており，特に作戦能力因子は多くの試合経験や日々練習の中で身につくものであることから，ジュニアユースサッカー選手の競技経験年数が大学サッカー選手よりも少ないことがこのような差を生じた要因として考えられる。

3グループ（K，G，F）の違い

ジュニアユースサッカー選手の心理的競技能力に，学校スポーツでの部活動とＪリーグチームの下部組織でのクラブの一員としてサッカーを行っているチームの指導・運営体制が異なる環境による影響が見られるのかどうか検討するため，3グループを比較した。

各チームの12の下位尺度を円グラフで表した図7より，

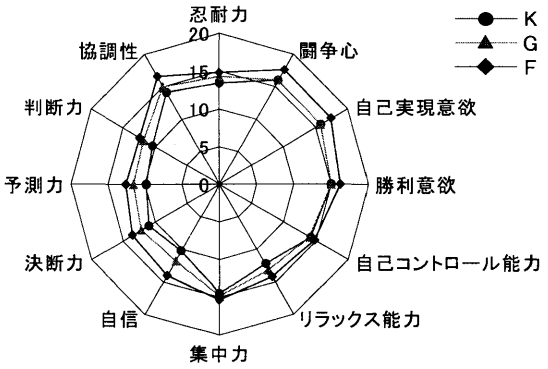


図7.　各チームの心理的競技能力について

闘争心，自己実現意欲，勝利意欲においてＫサッカー部とＧサッカー部は同様の得点傾向を示し，Ｆサッカークラブより低い得点を示した。つまり同様の得点傾向をもっているＫとＧサッカー部は学校教育の中の部活動に属する選手，高い得点を示したＦサッカークラブは学校教育の枠を離れ，サッカー専門指導を受けるクラブチームの選手という違いがこの傾向の背景に存在する。闘争心，自己実現意欲，勝利意欲には学校教育とサッカー専門指導という目的・目標の違い，指導環境が反映されていると考えられる。Ｆサッカークラブの得点が高いという結果の背景には，全国大会などのタイトルがかかった試合やクラブの上のカテゴリーであるユースと試合をすることで，闘争心が備わっていくというクラブチーム特有の環境が影響していると考えられる。またＦサッカークラブのカテゴリー（U-13・U-14・U-15）の選手は全員が一般でいうところのレギュラー選手であることから，円田ら（1999）が大学運動部のレギュラーおよび非レギュラー選手の心理的競技能力を比較すると，ほとんどの尺度でレギュラー陣のほうが高い得点を示した結果と同様に高い得点を示した可能性が考えられる。また自己実現意欲に関して，Ｆサッカークラブはクラブ内のカテゴリーごと選抜され，昇格していくというシステムがあり，最終的にはプロのＪリーガーになりたいという明確な目標を持っていることが高得点を示した理由としてあげられる。自由記述のアンケートによると，練習ノートを活用し，練習，試合における反省，課題から自己実現への短期から長期の目標を記入している。ほとんどの選手がプロサッカー選手になることを希望しており，その夢の実現のために日々努力しているということがこの結果に反映されている。この結果は指導者が選手を導いていく上で目標を設定させることの重要性を示している。

一方，自信，決断力，判断力，予測力において，それぞれに段階的にF，G，Kの順に得点差があり，得点の高いFチームから全国大会出場経験の有無，選手自身が持っている技術などの競技力の差が反映されていることが考えられる。自信には競技レベル差が大きな影響を与えているということが報告されている（徳永ら2000）。Gサッカー部は全国大会優勝経験があり，そのことがKサッカー部よりも高い得点をもたらした要因だと考えられる。またFサッカークラブは全国大会の常連である上に，地域で選抜されてプロの下部組織に入ったという「選ばれしもの」の自信と自負，プロの指導者，非常に競技力の高い元選手からの指導を受けていることなどから，より高い得点を示したと考えられる。また決断力については，勝敗を分ける厳しい試合状況や相手やボールなどのさまざまな状況から，そのときに最も有効なプレーを選択する選択肢の多さが行動を決定していると考えられ，全国大会での試合経験，Jリーガー育成過程で重要視される状況判断と実行の関係が影響していると考えられる。

FサッカークラブがGおよびKサッカー部に対して有意に高い得点を示した予測力，判断力は，一つの場面に遭遇したときの対処方法を多く持ち，その状況にもっとも有効なプレーを選択できるということが，この結果に反映されていると考えられる。また，指導者の選手時代の経験，またライセンスを獲得するために多くの指導方法を学んでいることから，選手のプレーに対してさまざまな角度からアドバイスできることが影響していると思われる。木幡ら（1987）は全国大会に出場した中学生サッカー選手の心理的適性について体協スポーツ競技動機調査を用いて調べ，コーチとの関係において，コーチ受容得点が高く，対コーチ不適応得点が低いことから，中学生年代の選手は対コーチとの関係が非常に密接であり，コーチへの依存傾向が強いことを指摘している。つまりジュニア期の選手にはコーチの指導・思想の影響が非常に大きいと推察される。さらに指導者の経験，練習量の違いがこれらの量的な違いを生み，予測力・判断力に影響を与えていることも考えられる。

3グループの心理的競技能力を比較する中で，精神の安定・集中因子ではFサッカークラブの得点が高い傾向は見られたが有意な差は示されなかった。しかし下位尺度であるリラックス能力にのみFサッカークラブとGサッカー部の間に有意な差が示された。また協調性についてもFサッカークラブがKサッカー部に対してのみ有意に高かった。つまり競技成績に直接結びつくような競技意欲や自信，作戦能力といった因子に関してはジュニアユース年代のサッカー選手にとって異なる指導環境で差が生まれ，一方で自己管理や気持ちの切り替え，冷静さといった自分自身をコントロールする能力を反映する精神の安定・集中という因子については，未発達の状態であることが推察される。

このようにジュニアユース年代においていくつかの要因によって，心理的競技能力には差が生じてくることが明らかになった。その選手の置かれている状況によって心理的競技能力は異なることから，この年代においてすでに心理的スキルは変容の過程に入っていると考えられる。今までのところ，ジュニアユース年代の選手の心理的競技能力がこの後どのように発達していくのかという縦断的調査はほとんど行われていないことから，定期的に調査を行い，心理的スキルの発達過程を明らかにしていくことが今後の課題として挙げられる。

ま と め

本研究は，ジュニアユース年代のサッカー選手を対象に心理的競技能力診断検査を用いて，ジュニア期における心理的競技能力の現状把握，今後のジュニア期の選手育成のための基礎的資料を得ることを目的として調査を行った。対象者はジュニアユース年代のサッカー選手でKサッカー部55名，Gサッカー部55名，Fサッカークラブ67名，競技意欲，自信，作戦能力計117名であった。ジュニアユースサッカー選手の心理的競技能力はで競技レベル，チームの選手構成，指導環境によって異なることが示唆された。一方で，精神の安定・集中で有意な差は見られなかった。ジュニア期にすでに心理的競技能力に差が見られることから選手・チーム育成には，選手個人への適切な指導や心理的側面を考慮した指導が重要になる。またジュニアユース年代の選手の心理的競技能力がこの後どのように発達していくのかという縦断的調査はほとんど行われていないことから，継続的に調査を行い，心理的スキルの発達過程を明らかにしていくことが今後の課題として挙げられる。

引用文献

村上貴聡，徳永幹雄（2002）全国選抜ジュニアテニス選手権出場選手の心理的競技能力に関する研究，テニスの科学，10：56-68

木幡日出男，戸苅晴彦，杉山進，岩村英吉，富岡義雄，松原裕，福井哲，江口潤（1987）中学生サッカー選手の心理的競技能力，第7回サッカー医科学研究報告書，108-114

徳永幹雄，（1996）ベストプレイへのメンタルトレーニング．心理的競技能力の診断と強化，大修館書店

徳永幹雄，橋本公雄（1988）スポーツ選手の心理的競技能力のトレーニングに関する研究(4)――診断テストの作成――，健康科学，10：73-84

徳永幹雄，橋本公雄（1994）心理的競技能力診断検査用紙（DIPCA.2，中学生．成人用），トーヨーフィジカル

徳永幹雄，吉田英治，重枝武司，東健二，稲富勉，齋藤孝（2000）スポーツ選手の心理的競技能力にみられる性差，競技レベル差，種目差，健康科学，22：109-120

上向貫志（2000）慶應義塾大学体育会部員の心理的競技能力に関する研究，慶應義塾大学体育研究所 プロジェクト研究報告 2000，71-76